

ピエール・マビュー 『リジューのテレーズ』 (1937) ——政治・思想的パンフレットから幸福論へ

有馬 麻理亜

[抄録]

本稿ではピエール・マビューの医学者、文明論者としての作品『リジューのテレーズ』(1937)を分析した。この作品は翌年に出版された彼の文明論の例証として同じ時期に執筆されたもので、先行研究においては思想的攻撃文書の性格を持つとされている。分析をつうじて、この作品が付属的な存在ではなく、1930年代という歴史的背景、マビューの政治的活動、医学者としての関心が反映された重要なテキストであることが判明した。また作品には彼の思想の特徴であるホーリスティックな一元論的世界観に基づく、未来に開かれた楽観的な運命論が通底しており、攻撃的なパンフレットというよりも幸福論として読むことができる作品であると示した。

はじめに¹

本稿はピエール・マビュー(1904-1952)の作品分析をつうじて1930年代半ばにおける彼の思想の輪郭を浮かび上がらせることを目的とする。マビューは1934年頃からシュルレアリスム運動に参加した医学者であり、民間伝承、魔術、占星術、オカルトに精通していたことで知られている。代表作に「驚異 le merveilleux」をキーワードとして古今東西の作品をまとめたアンソロジー『驚異の鏡』(1940)がある²。一方、彼はシュルリアリストたちの診療にあたり、ブルトンの娘の誕生を介助するなど「シュルリアリストの医師」としても知られている³。晩年には、友人としてシュルリアリストたちとの付き合いを続けたものの、運動自体とは距離を置いていた。レミー・ラヴィーユの論文のタイトルにある「シュルリアリスムの同伴者 un compagnon du surréalisme」という言葉は、このようにシュルリアリスムと付かず離れずの関係を保ちつつ、自らの知的関心を追求した彼の姿をよく表している⁴。

しかし、本稿ではこのようなシュルリアリストとしてのマビューではなく、本業の医学者としての活動に着目したい。マビューは医師として患者の診療に携わる一方で、パリ大学医学部やパリ人類学学校で講義を担当し、死の直前には「村のテスト」と呼ばれる投影的心理テストを発明した。また、彼の論文は生理学、形態学、外科手術、ホメオパシーなど幅広い主題を扱っており、形態学や分類学といった分野に関連する研究会を仲間と設

立し、研究雑誌を刊行している。これらの熱心な活動は、彼が幼少期に夢見た「人間の科学」を確立するためであった⁵。医学者としての作品には『人間の構成 La construction de l'homme』(1936)、『リジューのテレーズ Thérèse de Lisieux』(1937)、『エグレゴールまたは諸文明の生 Égrégore ou la vie des civilisations』(1938、以下『エグレゴール』)、『人間学入門 Initiation à la connaissance de l'homme』(1949)という四作品がある。『人間学入門』が『人間の構成』の改訂版であることを踏まえると、ほぼ同じ時期に発表された最初の三つの作品がマビーユの「人間の科学三部作」であると考えられることができるだろう。本論ではそのうちカトリックの伝説的聖人を論じた『リジューのテレーズ』を分析する⁶。その理由は、第一にマビーユがこの作品を自らの学説の具体的例証として構想していることから、作品を分析することで彼の難解な思想の特徴を具体的な形で示すことができるからである。もう一つの理由は、この作品が学説の例証という付属的な性格だけでなく、執筆された当時の歴史的背景や彼の科学者としての関心、政治・思想的傾向が反映されている重要なテキストであるからだ。

この作品が日本でほとんど知られていないことから、まずは先行研究における作品の評価と本論の立場を紹介したうえで、主題である聖人テレーズや、1930年代半ばの歴史的・思想的状況、マビーユがこの時期参加した政治活動など、この作品を取り巻く状況を確認する。その内容をふまえて、マビーユの分析方法や彼の聖者にたいする眼差しがいかなるものか考察する。最終的には、本稿をつうじて彼の思想の特徴や作品に込められたメッセージを明らかにしたい。

1. 『リジューのテレーズ』：作品そのものとその周縁

1-1. 政治・思想的パンフレットとしての『リジューのテレーズ』とアレクシス・カレル

まずは先行研究における『リジューのテレーズ』の位置付けを確認し、筆者の立場を明確にしておく。ラヴィーユは作品を「攻撃文書の性格を持った精神分析的モノグラフ」と紹介している⁷。この表現はまさに作品の性質をよく捉えているが、ラヴィーユの論文はマビーユの伝記的側面を重視しており、作品の詳細な分析はほとんどない。鈴木雅雄は聖女というテーマに関連して『リジューのテレーズ』を紹介し、マビーユの聖者にたいする批判的眼差しが1940年の『驚異の鏡』では民間伝承を見る眼差しへと変化していると指摘している⁸。初版の改訂版に付された解説においてラドヴァン・イヴシク (Radvan Ivsic) は、マビーユが愛の「見者」としてとし、フーリエの愛のイメージへと接近させている⁹。ジル・ブヌールは、名前は挙げられてはいないものの、この作品はマビーユによるアレクシス・カレルにたいする反論だと解釈している¹⁰。

筆者もまた、カレルとマビーユの関係には以前から注目しており、この問題については

すでに別のところで詳しく論じた。そこでここでは要点を紹介しておく¹¹。マビーユが最初の『人間の構成』を発表する一年前、ノーベル賞医学者であるカレルの『人間、この未知なるもの』(1935)が出版された。幼いマビーユが「人間の科学」を打ち立てる夢を抱いたことはすでに述べたが、カレルもこの本で「人間の科学」の設立を提唱しており、さらに両者はともにこの科学を確立するために総合的な知が必要であると主張した。ベストセラーとはほど遠いマビーユの作品とは異なり、通俗科学的であちこちに大衆受けする社会批判を織り込んだカレルの書は、そのボリュームにもかかわらず、「ノーベル賞受賞者」という名声も伴って瞬く間に世界中で売れることとなった。しかし、世襲的社会から能力に基づいた「生物的階級」への移行を提案するカレルの優生学的思想は、最終的に断種の勧めや精神病患者など社会的弱者を抹殺するような発言にすら繋がっていく。これが後にナチスによって受け入れられるとともに、ベタン元帥の協力を得て、ヴィシー政権下で研究所を設立する下地となった。マビーユは『人間の構成』の序文でカレルの本がこれほど売れているのは、人々が人間とは何か知りたいと考えている表れであり、彼の『人間の構成』もその知の獲得に寄与するとともに、カレルへの返答となると述べている。ただし、この序文を除いて、この作品でカレルに言及している部分はない。戦後に出版された『人間学入門』の序文で、マビーユはヴィシー政権に重用されたカレルのファシズム的性格を見抜いていたと告白している。たしかにファシズムに抗い、亡命までしたマビーユがカレルにたいして批判的になるのは当然のことだろう。そのような意味でブヌールの指摘はもっともだといえる。

とはいえ、マビーユとカレルを単なる対立関係として捉えるならば、それは単純すぎる見方だと言わざるをえない。カレルのファシズム的要素を見抜いていたと述べたマビーユであったが、亡命中、友人バンジャマン・ペレに宛てた手紙にはカレルの研究への興味を語っている。筆者の調査によってマビーユとカレルは形態学 *morphologie* や生物分類学 *biotypologie* という学問をつうじて共通の人脈を有していたことや、彼らの属した医学サークルが大戦間期にフランスで流行したホーリズム医学と分類されることも判明している。マビーユ自身はホーリズムという語を使用していないが、ヴァイス (G. Weisz) の研究によれば¹²、フランスではホーリズムという語は1960年代まで流通しておらず、大戦間期にはこの用語の関連するさまざまな言葉が用いられた。その例の一つが「統合 *synthèse*」であり、マビーユやカレルが目指した知の「統合」と一致している。さらに、この時代のフランスにおけるホーリズム医学の特徴といえる分野 (新ヒポクラテス派、生物分類学、ホメオパシーなど) についても多くの一致点が見られる。マビーユにはホメオパシーを扱う論文があり、彼の共同研究者であるマルティニーは1937年「新ヒポクラテス派医学」の第一回国際学会の事務総長を務めていた。『人間学入門』におけるマビーユ

のカレルへの言及はたしかに批判的ではある。しかし同時に彼は古いタイプの分類学がこうした優生学的差別思想に行き着くリスクに触れ、あらたな人類学の必要性を説いている。研究者として同じ目的を抱いていたマビエユのカレルへの眼差しは道を誤った優秀な先駆者への眼差しではなかったのだろうか。

本稿はブヌールと同じく『リジューのテレーズ』がカレルへの返答として解釈可能だという立場をとるものの、対立構造だけでなく共通の課題に取り組んだ学者として比較対照することが重要だと考える。ブヌールは言及していないが、カレルもまた聖人と縁があった。彼が事実上フランスの医学界から追放され、アメリカに渡ったのは、ルルドの奇跡について曖昧な態度を見せたことで、科学者、教会双方から批判されたからである¹³。マビエユがこの事件を知っていたかは不明だが、『人間、この未知なるもの』には敬虔なカトリック教徒で神秘体験やルルドの奇跡を擁護するカレルの文があちこちに見られる¹⁴。証明することはできないが、神秘主義や不可知論者にたいして批判的であったマビエユが、同じ目的を持つ学者として、聖者の解釈に取り組んだことは十分に考えられる。この点については、本稿の最後に振り返ることとする。

1-2. 聖テレーズにたいするマビエユの眼差し

そもそもマビエユはなぜ分析の対象に聖テレーズを選んだのか¹⁵。1873年に生まれたテレーズ・マルタン（以下テレーズと記す）は幼いころから神の道に進みたいと欲し、14歳で教皇レオ十三世に謁見して修道会に入会する許可を得ようとした。その場では了承されなかったが、翌年リジューのカルメル会に入信した。しかしその後まもなくして、1897年、結核のため24歳で亡くなる。彼女が有名になり、教会によって例外的な早さで列聖されるに至ったのは、死後に出版された自叙伝（『ある魂の物語 Histoire d'une âme』、初版は1898年）の影響が大きい。実際「『自叙伝』は三十五か国語に訳され、百万部が売れた」そうだ。この自叙伝に彼女の奇跡的な神秘体験が語られていたことから、テレーズによって奇跡を得たとする人々が殺到する。その結果、「テレーズの死後十五年には、彼女の取り次ぎによって行われた奇跡の記録は、ぎっしりと埋められたページ三千枚」に達し、列聖時には「もはやすべての奇跡を記録することが不可能」なほどであった。第二次大戦中にもテレーズの人気は翳りを見せず、「一九四〇年には、毎日、平均三千通の感謝の手紙が、リジューのカルメル会修道院に殺到した。実に『彼女は奇跡をまき散らし、人々の心を変えた』」人物なのだ¹⁶。知識人にも影響を与えており、カトリック系保守派のクロードルやベルナノス、右翼政治家モーラス、カトリック哲学者で雑誌『エスプリ』の創始者ムーニエなどが彼女について作品や論考を書いている¹⁷。

しかしマビエユの目的はこの「奇跡の聖人テレーズ」を称えるためではなく、彼女の

「人間としての本当の姿 vérité humaine」(12)を暴露することであった。その真実とは、もはや終焉の段階にあるキリスト教文明と資本主義という時代が産んだ申し子という姿である。

いくら繰り返してもしすぎることはないのだが、テレーズは真にブルジョワ階級によって支えられた、時代おくれの腐りかけたキリスト教の象徴である。そしてこのブルジョワ階級もまた、支配力の末期に達しており、無意識ながらも自らが終焉することをはっきりと感じとっているのだ。(14)

冒頭から最後まで、マビユーは何度もテレーズを教会とブルジョワ社会の象徴であると繰り返す。時には「私がすでに確立した方程式：『テレーズ＝ブルジョワ階級の行為にカトリックのイデオロギーが付されたもの』」(36)などと定式化するに至っている。まさにこの作品はカトリック教会と過剰な資本主義にたいする反感というイデオロギーに基づいたパンフレットだといえる。しかし、全生涯をつうじて、マビユーは個人として政治的な活動を表立ってする人物ではなかった。作品の攻撃的な性格は、執筆された当時の歴史的背景と関係があるようだ。

1-3. 『エグレゴール』とスペイン内戦

『リジューのテレーズ』は翌年に出版された『エグレゴール』とほぼ同時に執筆されたとされ、この二作ともスペイン内戦に言及している。特に後者はスペイン内戦で犠牲となった革命派の兵士に捧げられているほどだ。そもそもマビユーはこの二作を対の存在として想定していた。『リジューのテレーズ』の序文には「ほぼ書き終わったこれらの問題 [= 宗教問題] にかんする概論書」(9)、「学説を説明する概括的な書」(10)、あるいは「私が仄かしたより完全な作品」(11)といった一連の表現を用いて、出版予定の『エグレゴール』の存在を暗示している。そのうえで彼は『リジューのテレーズ』の役割について次のように説明する。

そういうわけで、学説を説明する概括的な書を準備すると同時に、個々の論証 (démonstration)という手段を用いることが有益であると私は判断した。[...] 以下の短い報告書は小説風に潤色された伝記ではなく、実証的な結論へと導く正確な論証を目指すものなのだ。(10)

『エグレゴール』が彼の文明論の概論とすれば、『リジューのテレーズ』は彼の学説の正し

さを実証的に証明する、個別の例証として書かれた。では彼の学説とはどのようなものか。そもそもエグレゴールとは何か。エグレゴールとはすでに存在していたオカルトの用語である。そしてマビーユはこの語に「構成する諸個人の人格とは異なる、一つの人格を備えた人間の集まり」という新たな意味を与えた。つまり、エグレゴールとは個別の意識や人格の寄せ集めというよりも、個々の人間が溶け合って生まれた、一つの集団的意識、一つの人格を備えた魂のようなものとしてイメージできる。マビーユによれば、エグレゴールの最小の単位は一組の男女で、最大の例が文明であり、このエグレゴールはまた、有機体のように生まれて、死んでいくとされる。この文明の代表がキリスト教を基盤とする西洋文明（ヨーロッパ文明）であり、この文明が死に絶えるという運命を確固なものにしたのがスペイン内戦だと考えられている。マビーユは死者数でいえば第一次世界大戦がもっともひどく、女性や子どもが虐殺されるという点では、エチオピアや中国の方がおぞましいと言いつつも、スペイン内戦の特殊性を強調している。彼にとって、この戦いは革命を求める集団的意識が死の運命に抗するという、エグレゴールが自身の運命を賭けた戦いであった。しかも特定の国民や民族という枠を超え「あらゆる圧制、あらゆるヨーロッパやその他の世界の権威（キリスト教、資本主義、似非自由民主主義）」に抵抗する者たちが兵士として「世界中のあらゆる国から自然発生的に」集まってきたことも、エグレゴールの死にゆく運命を変える希望としてマビーユには見えたようだ（Cf. EG, 181-182）。彼はこの戦争を神話の誕生とまで表現する。

これらの迫害された者たちはこの惨事に己自身の惨事を、そしてようやく人間らしい生の地への希望を見いだしていた。[...] 私は断言する。私たちは一つの巨大な神話の起源を目撃したのだ。革命派のスペインは善を完全に体現するものではないが[...]、善を含んでいる。自らの運命を意識することを目指して人類を蜂起させる奇跡的な跳躍がここでは完璧な形態をとっている。（EG, 182）

しかし、革命は打ち破られ、西洋文明は運命に抵抗できなかった。この文明はやがて死に絶え、新たな文明が世界のどこかで誕生していくこととなると彼は予告する。

もしスペイン [=反フランコ派] が勝利していたなら、ヨーロッパ全体が救われていた可能性があった。しかし諸文明の自然の歩みは、もう一度、いかなる奇跡によっても乱されることはなかった。運命は成し遂げられ、老いた者たちは死ぬ。後世の人間たちは、たどたどしくも自ら努力することで、生成のための新たな力を見いださねばならない。（EG, 182-183）

このようにマビユーにとってスペイン内戦は自分たちが生きる文明の終わりを示していた。この事件の衝撃からか、彼はシュルレアリスムの枠を超えた間接的な政治活動に参加しはじめる。

1-4. マビユーの政治的活動

スペイン内戦とは、フランコを中心とするファシズム勢力（ドイツ・イタリアの応援）と共和派を支持する左派連合（人民戦線、共和派、アナキスト、共産党、各国の義勇軍など）との凄惨な戦いであり、スペイン国内だけでなく周辺諸国も分断し、双方の陣営で虐殺が行われた。最終的にフランコ派の勝利によって、ファシズムの趨勢が決定づけられ、左派連合は迫害された。この戦争において、スペインにおけるカトリック教会は、反教条主義の共和派から暴力的な迫害を受けていたこともあり、フランコ派であった。そのため、フランス人の知識人においてもカトリックの右派（クローデル、ブラジリヤックなど）は当初フランコ派を応援し、カトリック左派（『エスプリ』誌のムーニエなど）は表向きには中立または反ファシズムの観点から共和派に共感していた¹⁸。マビユーは他のシュルレアリストたちと同様に共和派を支持する立場をとっており、1936年7月の開戦時には、ルネ・クルヴェルを中心とした集まりに参加し、共和派の亡命者のボランティア医師として協力すると伝えている¹⁹。

『エグレゴール』の内容と、この積極的なボランティアへの参加の意思を踏まえると、生涯をつうじて政治的信条を明示しなかったマビユーが、この頃シュルレアリストとしてではなく個人として政治的色彩の強い雑誌に寄稿していたことも不思議ではない。例えば1936年から翌年にかけて寄稿した *La Flèche de Paris* は、急進党左派出身のガストン・ベルジュリが創設した雑誌である²⁰。ベルジュリは反戦・反ファシズムのために左派を結集すべく、1933年共同戦線 (Front commun) を結成し、翌年には、後にエマニュエル・ムニエとともに雑誌『エスプリ』の創刊に関わったジョルジュ・イザールの第三の力 (Troisième force) を吸収して社会戦線 (Front social)、通称フロンティスト運動 (mouvement frontiste) を開始した。*La Flèche de Paris* はこの運動の機関紙である。この運動は反ファシズムのための左派の結集を呼びかけるもので、多くの社会主義者が参加していた。マビユーはこの雑誌に書評や芸術批評だけではなく、人民戦線の政治プログラムに呼応するテーマの論考を發表している（中産階級、労働者階級における休暇や観光旅行、若者におけるスポーツの重要性についてなど）。彼はまた、1938年から翌年にかけて、マキシミスム maximisme という小グループの *Les Cahiers du XX^e siècle* や *Ultimatum de la conscience française* といった雑誌にも協力している。この団体はほぼ無名の存在であったが、調査の唯一の手がかりとなったのが、編集長のポール・エステーブという人

物である。彼はネオ・ソシアリストであり、一時は人民戦線と同盟関係にあった共和派社会主義連盟 Union socialiste républicaine に加入するが、ここを出てマキシミスムを開始した²¹。この団体の雑誌には反戦思想や民衆による革命（革新）への意欲があふれている²²。マビーユは短い期間ではあるが、彼らの雑誌にモラル、革命、ファシズムといったテーマで記事を書いた。ベルジュリもエステーブも本来は反戦を重視する左派であったが、後に両者ともヴィシー政権下で力を持つという皮肉な運命を辿ることになる。ただ少なくとも 30 年代後半には反ファシズム・反資本主義者として活発な活動を見せており、それがマビーユとの接点になったのだろう。補足すると、マビーユは *La Flèche de Paris* に『エスプリ』誌のコレクションから出版されたホーリズム系の医師アルマン・ヴァンサンの『人間的な医学にむかって』（1937）について書評を書いている²³。この本が「第三の力のメンバー」や「『エスプリ』誌の友人」に捧げられていることから、この時期マビーユと人民戦線系社会主義者たちとは政治思想的に近い部分があったと考えることができる。実際、興味深いことに、マビーユと間接的につながるこの『エスプリ』誌には、彼の考えに近い意見を表明している者がいた。

『エスプリ』執筆者の一人である] セムプルンは、反徒の側についた聖職者を批判し、教会が民衆の反教権主義や迫害の対象になったのも、もとはといえば有産階級と密着した教会に責任があると断定し、みずからは「辱められ、忘れ去られ、貧しさのなかで見捨てられた民衆」の側に立つことを宣言した²⁴。

セムプルン同様、マビーユはカトリックが歴史上、社会構造、特にブルジョワ階級と一種の共犯関係にあると考えており、スペイン内戦では反共・ファシズム派に加担した教会にたいする強い警戒と怒りを感じていたのだ。『リジューのテレーズ』の序文にはこう記されている。

かつてないほどカトリック教会の活動は無視できないものとなっている。[...] 世界のあちこちで神秘主義的動向が生まれている。こちらではキリスト教を強化するため、あちらでは他の方向にといったように。一人の人間や一つの思想体系の背後に、民衆たちは狂信的に列をなす。それは判断の自由全体をあきらめさせるほどで、最終的には人間の尊厳を墮落させる。このような現在の動向において、私はカトリック教会が重大な役割を果たしていると思う。まさにリジューのテレーズについてだが、教会はいまだに数年で何百人の巡礼者を動員させ、地上から多数の聖地を生じさせることが可能なのだ。(8)

マビーユにとって、テレーズの聖性はカトリック教会が熱狂的な信者獲得にむけて使ったプロパガンダにすぎない。実際、彼はテレーズの人気を不動のものとした方法について、「巨大で、巧みに仕向けられた宣伝」、「教会が何世紀も前から民衆と魂を操作する技法」、「私たちの国の若い聖人が対象である驚くべき商業的搾取」などといった厳しい表現を用い、教会がテレーズを利用したと批判している（13）。ただし、彼はカトリック教会のプロパガンダだけがテレーズの人気を永続させたと考えてはいなかった。多くの人間が彼女を信奉し、リジューに巡礼に行き、彼女の肖像画を壁に貼ろうと欲したりするのは、彼女の姿が「彼ら自身の不安」に呼応したからだとし、「一人の人間が神話となりうるのは、その神話が集団の欲望と社会の感情の諸力を体現する限りにおいてである」と述べている（13-14）。つまり聖テレーズはキリスト教の宣伝の申し子であると同時に、社会の構造の歪みから人々が救いを求めて必要とする存在であり、一つの神話として機能しているのだ。ではその神話を生み出す人間の不安や欲望とは何か。マビーユは序文で「愛の問題」について唐突に語っており、これが関係していると思われるが、序文ではそれ以上の説明はない。そこでマビーユの分析をとおしてこの問題について考えたい。

2. 『リジューのテレーズ』と愛の問題

まずは作品の流れを確認しておこう。テレーズの分析は11の断章で構成されている。最初の「遺伝 L'hérédité」と題された章はテレーズの家系や病歴を考察する医学者としての視点で書かれており、次の「環境 Le milieu」という章では、教会と小ブルジョワジーという社会環境によってテレーズの病質が強化されたと分析される。残りの8章（「家族コンプレックス」「父親から神秘的夫へ」「夫—こども」「熱狂したマゾヒズム」「二次的サディズム」「愛の象徴的実現」「統合失調症」「死へ向かって」）においては、このような病質を持つテレーズが特定の環境で生きる過程で、抑圧された彼女の欲望や愛の形態が歪められ、病が悪化し、死へと加速度的に向かっていくまでの心理分析が展開される。最終章「愛とキリスト教二元論」では、テレーズという一個人の分析の結果から人間全体における愛の問題が論じられる。本稿では、医学者、一元論者としてのマビーユの視点を中心に取り上げつつ、彼が考える「愛の問題」の本質を明らかにしたい。

2-1. 遺伝子に基づく決定論？

医学者としてのマビーユの分析は、三つのポイントに要約される。第一に遺伝子と生物学を参照しつつ、彼女の家系が絶える運命にあったと指摘する点。第二に敬虔なキリスト教信者であるテレーズの両親が、熱心な信者であるがゆえに、逆説的に梅毒であったと診断される点。そして最後にテレーズ自身にも分裂病質があるとし、その病質が環境によっ

て悪化したと考えられている点である。もちろんテレーズとその家族について、梅毒や分裂病質があったなど今日まで一度も明らかにされておらず、あくまでマビーユの推論でしかない。

梅毒の診断理由として、マルタン夫婦が九人もの子どもをもうけたにもかかわらず、そのうち四人が出生後すぐに死ぬという早世の家族であったこと、母親はテレーズが四歳の時に若くして亡くなり、父親もまた徐々に身体が麻痺し、死の3年前には理解力にも翳りがあったことなどが挙げられている。またテレーズ自身も思春期に頭痛や背中への痛みがあったことから、マビーユは彼女が両親から引き継いだ梅毒による髄膜炎であったと診断している（18-20）。さらに後でもう一度ふれるが、マビーユはカトリックの教えによって、女性はよき妻、よき母として家庭に縛られる一方で、男性は性的な捌け口として家庭外の女性と付き合っていると批判的に語っており、この診断にはそのような彼の思想が影響を与えていると思われる。

興味深いことに、マビーユはテレーズの家族をエグレゴールのような一つの生命体としても分析している。テレーズの両親の家系であるマルタン・ゲラン一族は、叔母やいとも含めて、子どもが亡くなるか修道院に行ったため、もはや絶える運命にあった。マビーユはこの点に関心を抱いた。その理由として、彼は文明・社会階級・家族といった集団において生命が衰弱するのは、一般的に禁欲、自殺、不妊といった要素に因るものであるはずが、この一族には、その反対の多産という現象が見られることを挙げている（22）。この矛盾を解明するために、彼は異常なほど多くの花や実をつけて、重さで押し潰れそうになっている木が翌年に朽ち果てることがあることや、中毒症状に少量の薬剤を用いると症状がかえって活発になるが、多量に投薬すると症状が和らいだり、止まったりするといった例を挙げて、これらの現象には科学的な裏付けがあるとする。そこで彼が紹介するのがモーガンやブリッジらをはじめとする染色体の研究である²⁵。こうしてマビーユは遺伝的性質が染色体によって子孫へと伝達されるだけでなく、死もなんらかの形で細胞に書き込まれ、伝達されると主張する。いわゆる細胞のプログラム化された死のことだ。最終的に、彼は生殖細胞（彼は性細胞と呼ぶ）が死を運命づけられているにもかかわらず、子孫を残すための跳躍（「生の跳躍 élan vital」）を見せるために活発に活動すると述べ、テレーズの両親も家系が絶えゆく前に多産になったのだと結論づける（23-24）。

このようにマビーユの解釈の特徴は、一族をエグレゴールと捉え、植物や病原体とのアナロジーや、当時の先端科学である遺伝子研究との関連で分析することにある。モーガンが染色体によって遺伝情報が伝えられることを発見し、ノーベル生理学医学賞を受けたのが1933年であるから、彼の関心はまさに時代の影響を受けている²⁶。さらに、一元論者を自認するマビーユの思考には死への反抗としての「生の跳躍」が死を加速するという、

弁証法的な生命の動きが重ねられていることも見逃せない。結果として『エグレゴール』において提示された運命論的文明論もまた、遺伝学におけるプログラム化された死と同じように想定されていると考えることもできる。いずれにせよマビーユにとって彼女の非業の死は遺伝的に運命づけられていたのだ。

彼女のなかに死の実質的要素が存在している。それらは一世代前から、密かにくすぶり、準備されている。マルタン家とゲラン家の結婚を導くのは、これらの完全に明確な諸力である。この結婚において、これらの力は何物にも妨げられることはなく、それどころか、強化されている。これらの諸力がテレーズの肉体における実質的物質であり、病気や抑うつ的思考、さらには最終的な停止 [= 死] を約束するキリスト教信仰の高揚へと彼女を導いていくのである。(24-25)

マビーユの医師としてのもう一つの診断はテレーズが分裂病質をもっているというものだ²⁷。彼によれば、分裂病質の人間は外界との接点を持たず、関心すら抱くことなく、自らの世界に閉じこもっている (65)。

テレーズにとって、世界はあまり真実ではない。世界は神の存在のヴァリエーションを持つ表れとして理解される。[...] 世界は極限まで小さくなり、彼女と彼女の欲望の対象の内的対話を与える手段でしかない。[...] テレーズと彼女の情熱の神秘的対象との対話は危険な独り言にいたるのだ。(67)

ここでは現実と切り離され、幻想の世界のなかで自ら創り出した神と対話するテレーズと分裂病者の姿が重ね合わされている。このようにテレーズは、両親から引き継いだ病と自身の持つ分裂病質でもって、次第に現実世界と乖離されてしまったわけだが、この彼女の欲望の対象、幻想の世界の元となるのがキリスト教であり、彼女が自らの世界に引きこもるのを後押しするのが小ブルジョワという社会環境だとされる。

2-2. 小ブルジョワとキリスト教に基づく二元論的世界と不幸な愛

マビーユが見いだしたキリスト教の根源的な問題は、その二元論的世界観にある。彼はキリスト教の教えが減びる肉体で示される物質的世界と永遠の魂で示される精神的世界という二つの世界観で構成されていることを指摘する。そしてキリスト教が天上の世界を真の住処とし、地上を仮の世界でしかないと設定したことにより、現実世界と精神世界の価値は逆転し、信者は現実を軽視してしまう (Cf. 29-30, 80-81)。彼はテレーズの自叙伝に

「死後の天国での至福と夢を称揚するために、物や人間が貶められていないページが一枚も見られない」と述べ、テレーズが信仰によって死後の世界を理想化し、現実を軽視したことが問題であったという (31)。

もう一つが愛の問題である。キリスト教は肉体の愛を罪とみなし、貞節を美德とする教条によって、女性の欲望を抑圧する。マビュは母親を早く失ったテレーズが父親に強い愛情を感じていたことを伝記から読み取り、本来このような愛情は思春期以降、別の男性に向けられるべきものだが、彼女の家庭があまりに敬虔な信者であったため、この愛情はキリストという理想化された男性像に向けられたと分析する (Cf. 断章「父親から神秘的夫へ」)。また、このキリストという「神秘的な夫」がときに彼女にとって愛情を注ぐ子どもに変化していることにも注目する (Cf. 断章「夫—子ども」)。そこから、彼は教会が幼な子、青年、中年とあらゆる世代に対応してキリスト像を提供している事実に触れ、キリスト像があらゆる女性の欲望の対象として機能していると指摘している (Cf. 51-52)。さらに現実的な欲望の昇華方法として、マビュは儀式に着目する。特に聖体拝領は「テレーズが彼女の愛の理想的対象に触れる」唯一の行為と分析されている。マビュはフレーザーの名を挙げながら、聖体拝領に類似する行為は他の多くの宗教にも見られる古代の人喰いの実践の名残であると述べたうえで、ホスチアにキリストの肉体が存在しているとすれば、聖体拝領は具現化された肉体を食べるのと同じだとする (61)。そのうえ、マビュはこのホスチアがキリストの肉体であり生の種であり、相手を跪かせるなど実際の儀式の形態を考慮すると、聖体拝領は性行為と類似しているとまで述べている (63)。つまりテレーズにとって、聖体拝領は肉体の愛のかわりに抑圧された欲望を昇華させる代替行為だというのだ (Cf. 断章「愛の象徴的実現」)。

このキリスト教の教条に加えて、敬虔なブルジョワ階級という社会階層は、現実との乖離や二元論的愛の不幸を強化する条件となる。マビュはここで医学的、社会主義的な視点を導入する。人間は種の保存の本能をもち、死という運命に抗いながら生を延長させようとするはずで、それを可能にするのが「他の人間とのふれあい」や「明日のパンを確保する」といった現実生活で生きるための必要物だ (33)。また日々の生活における不正、貧困、病気もまた、結果的にキリスト教の二重性や矛盾を民衆に気づかせる要素となりうる (33-34)。しかし、ブルジョワ階級はそのような機会を持たない。マビュは彼らが「快適さと心地よい暇さに身を置き、労働者を犠牲にして獲得した金を利用して、死後の甘美な永遠の休息を自分に確約させるため、ミサに行き、寄進したりする」(34)だけで、「眼差しは天国に向けられても、[...] 生き残ろうと戦っている人間たちの痛ましい境遇には決して目を向けようと」しないと批判する (35)。そして彼はそのようなブルジョワ的態度をテレーズの自叙伝にも見いだすのである。

私は自分で何かをすることに慣れていませんでした。セリーヌがいつも部屋の掃除をしてくれていたし、私といえば、いかなる家事の仕事も担うことはありませんでした。ときおり、神さまを喜ばせるために、ベッドを整えたり、夜、セリーヌがいないとき、挿し木や活け花を部屋に入れたりしました。申し上げたように、これは私が神さまのために唯一したことなのです。(35)

有閑階級にいた彼女は現実の問題に直面する必要などなかった。それが彼女をいっそう現実から隔離させ、自分が生み出す幻想でできた内的世界に留まらせた。そのうえ父親はテレーズらに新聞すら読むことを禁じており(59)、通学開始も遅く(しかも宗教学校)、それまでの時期を親と姉妹だけで過ごさせていた(37)。マビーユは批判的な調子でこのようなマルタン家の教育方針を紹介している。さらに彼はテレーズの父親が妻の死後生涯独身を通したこと、娘たち全員をよろこんで修道院に送り出したという事実から、父親もまた、娘たちが現実の男性を愛することを望んでいなかった(現実世界において自分だけが愛情の対象でいたかった)ため、娘たちを閉鎖的な環境に置き、カトリックの教えを浸透させたと暗に非難している(47)。

このような環境と本来の性質によって、マビーユはテレーズが少しでも早く幸せになるために死へと急速に向かっていくと分析した。最終章ではこのテレーズの悲劇が一般化される。敬虔なブルジョワ女性においても愛の問題は同じだとマビーユは考える。彼女たちもテレーズと同じく、キリストを理想の男性像とするが、そのために現実の配偶者との乖離に苦しむ(82-83)。彼女たちは貞淑であるため愛について無知であり、親に従い、家業のために計略的な結婚をする。彼女らは無為でないように見せるため教会に赴き、歪んだ欲望の昇華として、愛情を子どもへと向ける(88)。さらに社会が女性の純潔を重要視し、肉体的にも妊娠の危険性があるため、女性にとって生殖行為は軽々しいものではなく性的抑圧は解消しない。家庭でもよき母としての理想化の重みで疎外される(94-95)。このような状況から、マビーユはヒステリーや精神病、不感症など、女性に多くの精神的不安定さからくる病が見られると医師らしい見解を見せている(93)。そして、彼はこのようなキリスト教とブルジョワ階級を基盤とする文明においては人間の内部の問題だけでなく、実際に出生率の低下が見られるため、種族の消滅に向かってしていると指摘する(94)。他方、マビーユは女性だけでなく、男性にも愛の不幸を認めている。ただし、男性には性的問題は生じないとされる。理想的な女性として妻がいても、女性を侮蔑しつつ金を払って欲望を満たすことができるからだ(94)。このような考えがすでに紹介した、マビーユがマルタン家の分析にあたって梅毒との関連を疑ったことに繋がっている。とはいえ、理想の愛については、男性も女性と同じであり、聖母マリアのイメージが払拭されず、「イエ

ス・キリストと聖母マリアの表象は、男女をうまく引き離すために、間に割って入ってくる」(96)。このように教会とブルジョワ階級の結びつきは、現実世界で愛の充足を人間に禁じ、人間を疎外するだけでなく、最終的に文明を衰退させると結論づけられるのである。

結論にかえて：ホーリスティックな一元論的世界観と幸福論としての『リジューのテレーズ』

このような文明の衰退にあっても、マビーユの作品は絶望で終わっていない。マビーユは自分ほど社会の変革を望む者はいないと言い、この変革のためには人間の外的環境と精神両方を変えねばならず、人間の精神を変えるためには「かれらの不幸の起源」を説明しなければならないと主張している(96-97)。これまで見てきたように、マビーユはテレーズの生を分析することで、人間の不幸の起源がキリスト教的二元論と行き過ぎた資本主義によって引き起こされていることを証明しようとしたのだ。また、マビーユはテレーズの人生を学ぶことは「単なる心理分析」ではなく、「攻撃的な社会批判」と「生のあらたな規範の提案」へと導かれると述べている(101)。その提案とはどのようなものか。

このように、性に影響を与えるタブーを破壊すること、低い地位に女性を繋ぎとめる鎖を破壊すること、男性の独裁的な権威を破壊すること。楽観的で創造的な愛、つねに困難であるが、最後に私たちの人生と両立しうるものだと判明する愛、この愛において解放された人間が結びつくこと。これが取り組むべきプログラムの大きな特徴だ。そこにはユートピアなどまったくない。(100)

性の解放、女性と男性の平等、そのような関係における自由な愛。ここで提案されたマビーユのプログラムは現代にもつうじるものであり、1930年代半ばの考えとは思えない者もいるかもしれない。しかし、冒頭から結論までマビーユが一貫して強調していたことは、人間の不幸は肉体と精神の愛が一致しないことであった。テレーズが神話となりえたのは「人間の不安」を映し出しているからだと言及してマビーユが述べていたことを思い出そう。この不安こそ、肉体と精神のバランスが取れないことによって引き起こされた感情なのだ。そしてマビーユは結論において、この作品で分析してみせた「昇華、転移、抑圧」といった心理学を学ぶことによって、人間はこの不安から身を守り、「教会が生み出した肉体と魂の間の溝を壊し、未知の愛を真の生に返す」ことが可能になるという(98)。これがマビーユの一元論的世界観に繋がっているのだ。

一元論者となること、つまり本質において深い統一 *unité* を見だし、混乱すること

なく環境に入ることは難しいことだ。[…] 価値ある理由もなく、時代おくれの唯物論者が望むような希望のない物質を選ぶのをやめなさい。またキリスト教の忠告に従ってむなしい精神性を選ぶのもやめなさい。[…] その反対にあなた自身の存在の統一 *unité* に向かって進むのです。困難だが可能である愛の使徒になりなさい。この愛がより大きな生の諸形態を形作り、死にたいして *contre la mort* 個人の進歩を現実的に約束するのです。(102)

物質性と精神性の統一がとれた、調和した存在になること。心と身体のバランスをとること、*contre* という前置詞が表すように、これが死に抗うと同時に死に備える方法として提案されている。これは『エグレゴール』の結論で、西洋文明の後に来るべき文明の方向性として、マビユーが提示する一元論的原則と同じ内容である。彼の想定する一元論的世界では、二項対立的要素が解消し「物質と精神の統一 *unité*」や「世界と人間の統一 *unité*」が可能となる (EG, 185-186)。上の引用ではその統一性について「より大きな生 *vie plus large*」という説明が与えられている。これは部分の総合が全体より大きいというホーリスティックなイメージと重なっている。

マビユーがホーリズムという語を初めて用いたスマッツの『ホーリズムと進化』(1926)を読んだかどうかは証明できないが、部分の総体は全体より大きいという原則や²⁸、「肉体と精神の断絶」ではなく「全体を構成する統一性と共に、そしてその統一において、肉体と精神は互いに支え合い、高め合い、高尚にする」といったスマッツの主張はマビユーの目指す一元論的世界観と共鳴している²⁹。また根本的にホーリズムは「統合」という語が代替として用いられているほどヘーゲル哲学と関係が深く、デカルト的二元論を乗り越える取り組みでもあった³⁰。死の運命に抗うための「生の跳躍」や生命体のように進化していくエグレゴールは、まさにヘーゲルの弁証法的進化のイメージにも呼応する。このように『リジューのテレーズ』はマビユーのホーリスティックな一元論的世界観を確認することができるテキストでもあるのだ。

また本稿の冒頭で予告した、カレルとの対比としてこの作品を解釈してみよう。ホーリスティックな思想をもつ二人の医学者は、あらゆる科学を「統合」することで「人間の科学」を確立しようとした。カレルも精神と物質というデカルト的二元論の乗り越えの必要に言及しており (HCL, 89-91)、精神病や性病といった病気と社会の関係を論じるなど、医学者として共通のトピックを扱っている。しかし、マビユーが提唱した男女の平等や自由な愛の結びつき、性の解放は、カレルの立場とはまったく対極にある。カレルは女性に優秀な子を産み、教育を与える役割しか与えておらず、むしろ女性の解放は作品の冒頭から最後まで否定されている (Cf. HCL, 354-355)。それにカレルは神秘体験や禁欲を勧める

立場であった (HCI, 182-185)。カレルが聖テレーズのような聖者を称揚し、むしろ神話化する立場にあるとすれば、マビーユは医学者としてテレーズを一人の人間として観察することで社会の病理を発見し、その治療法を示した。あるいは、彼はテレーズという個人の不幸を人間の根源的不幸へと普遍化し、教会にたいする対抗神話として示したとも言えるかもしれない。『リジューのテレーズ』はカレルの名前が参照される他のマビーユ作品よりも、多くの点において両者を比較対照することが可能な作品なのだ。

最後に、『エグレゴール』と『リジューのテレーズ』に通底する、染色体レベルで規定された運命論に立ち戻ろう。テレーズという個人、マルタン家、そして西洋文明もエグレゴールとして死ぬ運命を変えられなかった。このような決定論的な視点と彼の楽観的な提案にいかなる整合性が見られるのだろうか。『エグレゴール』の最後にはこう書かれていた。

みなさんは容易に気付くでしょう。社会的決定論を学ぶことは、自己満足的な運命論を導くどころか、その反対に人間の絶えざる反抗という避けられない運命が達成されるために、とても厳しく、つらい戦いが必要であることを示しているのです。(EG, 186)

いかに死に抗おうと運命を避けることはできない。しかし、エグレゴールの生には弁証法的進化のイメージが与えられていた。生命体の内部で絶えず進化を続けることで、その存在自体が死に至っても、別のエグレゴールとして再生する。このように彼の決定論は、自身の意識を変革し、死への運命と絶えず戦うことで、一元論的な調和した世界へ向かって、個人の存在を超えた、より大きな生に統合されることを重ねていくものではないだろうか。だからこそ、彼の作品にはどこか希望の感じられる楽観的な調子が見られるのかもしれない。このように『リジューのテレーズ』は1930年代半ばのマビーユの思想が反映された重要なテキストである。それは単なる批判的文書にとどまらず、第二次世界大戦へ向かいつつある人類の危機を察知したマビーユがその原因となる人間の病を見だし、治療法を記した幸福論でもあるのだ。

【注】

- 1 本研究は科研費（課題番号 19K00486）の助成を受けている。
- 2 ピエール・マビーユ『驚異の鏡』（編集委員：山中散生・小海永二）、国文社、1972年。
- 3 Cf. Sarane Alexandrian, « Un médecin surréaliste » (chapitre X), *Le surréalisme et le rêve*, Gallimard, 1974, pp. 443-455.

- 4 この論文はのちに出版された。現時点ではマビユーを単独で扱う唯一の研究書である。Remy Laville, *Pierre Mabilie : Un compagnon du surréalisme*, Faculté des Lettres et Sciences humaines de l'Université de Clermont-Ferrand II, 1983.
- 5 妻ジャンヌによれば、マビユーは幼少期に夢から覚めるや「人間の科学がしたい」と宣言し、父を驚かせたそうで、彼はこの夢が人生を決定づけたと考えていた。Laville, *op.cit.*, p. 4.
- 6 本稿は初版に Radovan Ivsic の解説を付したサジテール社の版を底本とする Denoël/Gonthier 社の普及版 (*Thérèse de Lisieux*, Denoël/Gonthier, 1978) を使用する。以後、作品の引用に際しては括弧に頁数のみを記し、本文で示す。また『エグレゴール』の引用は (EG, 頁数) と略し、同じく本文中に表示する。また、引用文の下線はすべて引用者による。
- 7 Laville, *op.cit.*, p. 24.
- 8 鈴木雅雄「聖女にバラの花束を——ピエール・マビユー試論——」、『早稲田フランス語フランス文学論集』、第5号、1998年、pp. 182-183.
- 9 Radovan Ivsic, « Éternel voleur des énergies... », *Thérèse de Lisieux*, *op.cit.*
- 10 Gilles Bounoure, « Pierre Mabilie et le merveilleux (médecin, marxisme, surréalisme) », *Contretemps*, 2012, p. 145.
- 11 「(研究ノート) 異端の医学者、ピエール・マビユー: 「人間の科学」から「全体論的人間学」へ」、『近畿大学教養・外国語センター紀要 (外国語編)』、11号(2)、2020年、pp. 47-64.
- 12 ホーリズム医学について次の論集に収録された二つの論文を参考にした。C. Lawrence and G. Weisz, « Medical Holism : The Context », G. Weisz, « A Moment of Synthesis : Medical Holism in France between the Wars », *Greater than the parts : Holism in biomedicine, 1920-1950*, Oxford university press, 1998.
- 13 カレルのルルドの体験記は死後に発見され、プロン社より『ルルドへの旅・日記断片・瞑想』(1949) というタイトルのもと出版された。
- 14 Cf. Alexis Carrel, *L'Homme, cet inconnu*, Plon, 1935, pp. 193-199. 以下、カレルの引用は (HCI, 頁数) で文中に示す。
- 15 本稿での主な参考文献は次のとおり。カルメル会『リジューの聖テレーズ 小さい花の物語』山口カルメル会訳、ドン・ボスコ社 1996年 (2019年). Sainte Thérèse de l'Enfant-Jésus et de la Sainte-Face, *Histoire d'une âme, écrite par elle-même*, Carmel de Lisieux, 1912. Guy Gaucher, *Thérèse de Lisieux. Histoire d'une vie Thérèse Martin*, Les Éditions du Cerf, 1982.

- 16 『リジューの聖テレーズ 小さい花の物語』、前掲書、pp. 11-16.
- 17 Guy Gaucher, *op.cit.*, p.231.
- 18 以下の歴史的内容については、渡辺和行『フランス人とスペイン内戦』（ミネルヴァ書房、2003年）を参考にした。
- 19 Laville, *op.cit.*, p. 20.
- 20 ベルジュリーと当時の状況については、次の研究を参考にした。ミシェル・ヴィノック『知識人の時代』塚原史・立花英裕・築山和也・久保昭博訳、紀伊國屋書店、2007年。渡辺和行『フランス人民戦線』人文書院、2013年。Jean-Louis Loubet Del Bayle, *Les non-conformistes des années 30*, Éditions du Seuil, 1969 (2001).
- 21 Cf. Jérôme Cotillon, « Les entourages de Philippe Pétain, chef de l'État français 1940-1942 », *Histoire@Politique*, Centre d'histoire de Sciences Po, n° 8, février 2009, p. 10.
- 22 Cf. *Ultimatum de la conscience française* (Hebdomadaire du Maximisme, mouvement du maximum social) フランス国立図書館に所蔵されている1939年の紙面を参照。残念ながら正確な日付が記録できなかったが「信仰や社会階級に関係なく共通の感性によって結ばれた」、「戦争、失業、独裁という同じ危険におびやかされた」、「私たちの愛：民衆」「私たちの憎しみ：戦争」などといった語が紙面上にコラージュのように散りばめられている。
- 23 Armand Vincent, *Vers une médecine humaine*, « Collection Esprit Témoignages contemporains », Fernand Aubier, 1937. この医師は註12の文献 (« A Moment of Synthesis : Medical Holism in France between the Wars », *op.cit.*) でホーリズム医学者と紹介されている。
- 24 渡辺和行、『フランス人とスペイン内戦』、前掲書、p. 301.
- 25 マビーユが紹介したのは Maurice Caullery の遺伝学の概論書である。(*Les Conceptions modernes de l'hérédité*, Flammarion, 1935.)
- 26 スティーブ・パーカー『医療の歴史』千葉喜久枝訳、創元社、2016年、pp. 338-339.
- 27 schizophrénie (現在の統合失調症) は20世紀初頭にオイゲン・ブロイラーに名付けられた。遺伝学と同じく医師としてのマビーユの知的関心を反映している。Cf. Pierre-Michel LLORCA, « TROUBLES SCHIZOPHRÉNIQUES », *Encyclopædia Universalis*.
- 28 J. C. スマッツ『ホーリズムと進化』石川光男・片岡洋二・高橋史郎訳、玉川大学出版部、p. 102.
- 29 同書、p. 248.
- 30 Cf. C. Lawrence and G. Weisz, *op.cit.*, pp. 2-4.